

エステル記 10 章 3 節 「モルデカイによる支配」

1A ハマンに取って代わったモルデカイ

- 1B 王の次の座
- 2B ユダヤ人全滅
- 3B 迫害者への虐殺
- 4B モルデカイを助ける首長たち

2A 御霊の人

- 1B 生まれながらの人
- 2B 新たな誕生
- 3B 御霊の思い

3A 霊と肉の対立

- 1B 肉による死
- 2B 御霊による肉の行ないの死
- 3B 命の支配
 - 1C 他者の益
 - 2C 平和と喜びの実

エステル記 10 章を開いてください。聖書通読の旅は、ついにエステル記の最後になりました。午後に 8 章から 10 章までを学びます。今朝は 10 章 3 節、エステル記の最後の節に注目します。

それはユダヤ人モルデカイが、アハシュエロス王の次に位し、ユダヤ人の中でも大いなる者であり、彼の多くの同胞たちに敬愛され、自分の民の幸福を求め、自分の全民族に平和を語ったからである。

私たちは前回の学び、4 章から 7 章までにおいて神がユダヤ人のために大逆転を行ってくださったところを読みました。ハマンが企んでいたユダヤ人全滅計画を、王妃エステルがハマンと王と三人だけの宴会で、暴露しました。ハマンはモルデカイを殺そうと柱を自分の家の庭に立てていましたが、王はそこにハマン自身をかけることによってその憤りが収まったとあります。

1A ハマンに取って代わったモルデカイ

そして 8 章以降に出てくる話は、モルデカイがハマンに代わって王の次の位に着くというものです。今読んだ箇所、「ユダヤ人モルデカイが、アハシュエロス王の次に位し」とあります。アハシュエロス王がモルデカイに権力を与えたので、ユダヤ人が全滅を免れただけでなく、彼が大いなる者となり、ユダヤ人は幸福と平和を享受することができるようになりました。

1B 王の次の座

ハマンが、王の次の権力を持っていたことを思い出すことは大事です。3章1節に、「アハシュエロス王は、アガグ人ハメダタの子ハマンを重んじ、彼を昇進させて、その席を、彼とともにいるすべての首長たちの上に置いた。」とあります。ハマンがあらゆる首長よりも上にいたので、王は彼に自分の指輪と渡して、彼の書く法令を王の名で書けるようにさせました。もし彼が王の役人の一人であれば、そのような力を持つことはできません。そして、この法令のゆえ、インドからエチオピアまでの全ペルシヤに対して、ユダヤ人を根絶やしにするという文書の写しが、それぞれの民族の文字で書かれて公示されました。このように広範囲に、くまなく影響を与えることができたのはハマンが王に次いで、ペルシヤの頭になっていたからでした。

2B ユダヤ人全滅

そして、なぜハマンが、モルデカイが自分に不敬であるとしてモルデカイだけを殺害するだけでなく、彼の民族を殺害すると意図したことを思い出すことも大切です。「ところが、ハマンはモルデカイひとりに手を下すことだけで満足しなかった。彼らがモルデカイの民族のことを、ハマンに知らせていたからである。それでハマンは、アハシュエロスの王国中のすべてのユダヤ人、すなわちモルデカイの民族を、根絶やしにしようとした。(3:6)」

モルデカイは、ハマンに深くひれ伏さなかった理由として、モルデカイは自分がユダヤ人だからと言いました。それでハマンは、モルデカイという個人だけでなく、モルデカイのユダヤ性を憎んだのです。モルデカイとしては、ユダヤ人の信じる神ゆえに、他のあらゆるものを神のように崇めることはできないとして伏し拝まなかったのですが、ハマンとしては自分にひれ伏さないようにさせているものが、そのユダヤ人の神から与えられたDNAにあると解して、民族自体を絶滅させなければいけないと考えます。

そして以前説明したとおり、ハマンはアガグ人であり、アガグはアマレク人でありました。アマレク人は歴史を通じてイスラエルを滅ぼすために生きてきた者たちでありました。ハマンの中にユダヤ人を滅ぼしたいという性向があったと考えられます。

3B 迫害者への虐殺

しかし、エステルの執り成しによってハマンがかえって柱につけられたところを私たちは読みました。8章において、エステルが再び王に懇願している場面が出てきます。それは、ユダヤ人を根絶する法令を取り消してくださいというお願いです。王は、取り消そうと答えませんでした。むしろ、以前ハマンに指輪を渡したように、彼女に渡して、自分がよいと思うように、王の名で書いて王の指輪で印を押しなさいと言いました。ペルシヤの法令は取り消すことができないからです。しかし王は、前の法令に対抗する新たな法令を作れば、それでユダヤ人が虐殺から救われるではないか、と意図を持っていました。

そこでモルデカイが、文書を作成します。それはこういう内容です。「その中で王は、どこの町にいるユダヤ人にも、自分たちのいのちを守るために集まって、彼らを襲う民や州の軍隊を、子どもも女たちも含めて残らず根絶やしにし、殺害し、滅ぼすことを許し、また、彼らの家財をかすめ奪うことも許した。(8:11)」ハマンがユダヤ人を根絶やしにすると定めた、第十二年の十三の日に、その同じ日に、ユダヤ人を滅ぼそうとする者たちをユダヤ人たちが自分たちを守るために滅ぼしてよいという許可でありました。ですから、迫害者は自分たちが殺されるのを恐れてユダヤ人を殺すことができなくなる、ということでもあります。

4B モルデカイを助ける首長たち

しかし、それだけでは足りません。ユダヤ人が自分たちの命を守るために戦っても相手が優勢であれば殺されてしまいます。ユダヤ人と彼らを迫害する者たちの間の内戦になる可能性もあります。しかし、そのことは起こりませんでした。「その日、ユダヤ人が自分たちに害を加えようとする者たちを殺そうと、アハシュエロス王のすべての州にある自分たちの町々で集まったが、だれもユダヤ人に抵抗する者はいなかった。民はみなユダヤ人を恐れていたからである。諸州の首長、大守、総督、王の役人もみな、ユダヤ人を助けた。彼らはモルデカイを恐れたからである。というのは、モルデカイは王宮で勢力があり、その名声はすべての州に広がっており、モルデカイはますます勢力を伸ばす人物だったからである。(9:2-4)」モルデカイが勢力を伸ばしていたのです。それで、諸州の首長たち、太守、総督、役人はモルデカイを恐れていたので、ユダヤ人を迫害するほうではなく、迫害者を滅ぼすユダヤ人を助けたのです。

このように、どちらが頭になるかによって、ペルシヤ全体が影響を受け、ユダヤ人の運命が決まりました。ハマンが頭となり、彼が法令を出し、それでユダヤ人が滅びそうになりましたが、今度はモルデカイが頭となり、彼が法令を出したことによって、ユダヤ人を滅ぼすという法令は生きていくものの、それに対抗し、それに打ち勝つ影響力を持っていたのです。

このように私たちは、誰が頭になるかによって全てが変わってくることを知ります。第一人者が何をしたかによって、その後続く人々はその行為の影響下の中にいます。それは一番上のボタンをかけ間違うと、その後のボタンもかけ間違えざるを得ないのと似ています。

人は全て死ぬという事実を誰も不思議に思ったり、疑ったりしていません。けれども、実は当たり前のことではなかったのです。人は元々死ぬようには造られていませんでした。しかし、アダムという、神が最初に造られた人が罪を犯したために死ぬこととなり、その後に出てきた全人も罪人として生まれ、その罪のゆえに死ぬこととなります。「そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に、..それというのも全人類が罪を犯したからです。(ローマ 5:12)」全人類は、アダムを頭として、その影響下に生きています。ですから罪を犯し、死ぬしかないために生きているのです。全世界がボタンのかけ間違え状態にいるのです。

しかし、神は大逆転を与えてくださいました。それは、罪を犯したことの無い方を罪人とみなすことによる大逆転です。私たちの罪をキリストが代わりに負ってくださいました。このことによって、キリストの義が代わりに私たちに転嫁されて、私たちがキリストにあつて義人と数えられ、新しい命を持つようにしてくださったのです。モルデカイによってユダヤ人の救いがペルシヤ中に広がったように、キリストによって信じる者に対する救いが全世界に広がったのです。「また、賜物には、罪を犯したひとりによるばあいと違った点があります。さばきのばあいは、一つの違反のために罪に定められたのですが、恵みのばあいは、多くの違反が義と認められるからです。もしひとりの人の違反により、ひとりによって死が支配するようになったとすれば、なおさらのこと、恵みと義の賜物とを豊かに受けている人々は、ひとりの人イエス・キリストにより、いのちにあつて支配するのです。(ローマ 5:16-17)」

これをローマ書 8 章では、「罪と死の原理」と「いのちの御霊の原理」と呼んでいます。「なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。(8:2)」多くの人があることを誤解して悩んでいます。それは罪と死の原理から解放されたということを、罪と死の原理がなくなったと思っていることです。けれども、ハマンの作成した法令が、モルデカイが頭となった後でも残っているように、罪と死の法則が存在しなくなったのではありません。自分が神に逆らうことをする誘惑を受けて、時にそれに負けて罪を犯すと、私はまだ救われていないと勘違いするのです。そうではありません。いのちの御霊の法則が働いているので、罪と死の法則に対抗し、打ち勝つことができます。

ちょうど、重力の法則を考えてください。どんなに空に飛ぼうと思っても、無理であります。けれども、実際に空を飛んでいるものはたくさんありますね。まず鳥です。そして飛行機があります。鳥の翼も、また飛行機の翼も、「重力」とは別の「空気力学」があります。あるいは「揚力」と呼ばれるものです。翼の上と下に当たる空気の圧力が異なるために、上のほうが圧力が小さくなるので、相対的に物体を下から持ち上げる力が働きます。重力の法則と空気力学が同時に存在できているように、罪の力と、御霊による力は同時に存在しています。そして御霊の力はアダムから引き継いでいる罪の性質を持つ、肉に対抗して、打ち勝つことができます。

2A 御霊の人

ここで改めて、人の構造について考えてみたいと思います。「その後、神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。(創世 2:7)」とあります。いのちの息は「霊」とも訳せる言葉です。神がこの世界を造られる時に、植物に対しては体だけを与えられました。けれども、動物に対しては体だけでなく、意志や感情、知性も与えられました。これを聖書では「魂」と言います。しかし神は人に対しては、体と魂だけでなく、霊を与えられました。この霊によって、人は自分を造られた神を覚え、永遠を思い、自分が動物ではなく生きている意味を見出すのです。

ところが、アダムが罪を犯しました。神は、「この木から取って食べれば、必ず死ぬ」と言われましたが、彼は取って食べた時に死にませんでした。裸であることが恥ずかしくなり、神が歩いておられた時に、隠れて逃げたのです。神と距離ができてしまったのです。神とつながらなくなったので、その霊は死んでしまったのです。肉体は生きているけれども、霊は死んでしまいました。ちょうど、コンセントから離れている電気器具のように、霊は存在しているけれども命を失っているのです。

1B 生まれながらの人

そのため、アダムから生まれた者たちは全て、霊が死んだままで生まれています。肉体は生きているのですが、霊は死んでいるのです。そのため、自分の思いは常に、何を食べようか、何を着ようかという、自分の肉体を生かすことだけのために費やされます。「なぜ、そのようなことを行なっているのですか？」と尋ねても、それに答えることはできません。これを聖書では、「生まれながらの人」と呼んでいます。あるいはイエス様は、「肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。(ヨハネ 3:6)」と言われました。

2B 新たな誕生

けれども、十字架につけられたキリストを信頼し、死者の中からイエスがよみがえられたことを信じるならば、神はご自分の御霊によって私たちの霊を生かしてくださいます。新しく生まれるのです。自分の内に新しい、神の性質が与えられます。私たちがこれまで自分の肉体にある力では決してできなかったことを、神がその性質によってキリストにあって行ってくださるのです。

3B 御霊の思い

そこで私たちの思いには、御霊によって支配を受けることができるようになります。もちろん、肉体の欲求はそのまま存在します。そして肉体による欲求そのものが悪ではありません。食べたい、飲みたい、肉体の関係を持ちたいということもあるでしょう。しかし御霊に導かれると、これらの欲求を神の目的のために用いることができます。例えば男が女と結ばれ、子孫を残すためにその欲求が用いられます。肉の欲に支配されるのではなく、神の御心にしたがってそれらを逆に自分が支配できるのです。

したがって、私たちはいつも、御霊による思いを抱いているのか、肉の思いを抱いているのかのどちらかであることを教えています。「思い」の中でどちらの支配を受けているかの、二者択一であります。ローマ 8 章 5-6 節にこうあります。「肉に従う者は肉的なことをもつぱら考えますが、御霊に従う者は御霊に属することをひたすら考えます。肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。」ここにはっきりと、肉の思いは死であるとあります。肉の思いは良くない、益にならないという相対的な言い方ではなく、死に至ると言っています。そして御霊の思いはいのちと平安です。死か命かのどちらかしかないのです。

3A 霊と肉の対立

したがって、ハマンがモルデカイを非常に怒って、モルデカイだけでなくユダヤ人を根絶やしにしようとするその姿は、まさに肉によって死をもたらそうとする力を映し出しています。そしてハマンが殺されて、モルデカイがユダヤ人を殺そうとする者たちを虐殺して滅ぼすところには、御霊によって肉の行ないを殺す姿が映し出されているのです。

御霊と肉が共存できず、どちらかが生きて、どちらかが死ぬ二つしかありません。霊と肉は対立しているのです。「私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。(ガラテヤ 5:16-17)」

1B 肉による死

聖書では、信仰をもって神の新しい命が与えられても、アダムから受け継いだ罪の性質を宿している体のこと「肉」と呼びます。しばしば、私たちはクリスチャンが犯した罪、また悪い行いを聞いて、「なぜ、クリスチャンなのにこんなことができるのか？」と驚愕する時があります。けれども、驚くに値しません。なぜなら、肉は生まれた時と全く変わらず、信仰を持つ前と後では変わることはないものだからです。多くの人が自分を見つめて、全く変わっていないとがっかりするのですが、がっかりしないでください。全く変わらないのです！「というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。肉にある者は神を喜ばせることができません。(ローマ 8:7-8)」

私たちは肉を改良することはできません。変わるのは、主が到来して、この体を栄光の体に変えられる時であります。だから、肉に反応して行動すれば、クリスチャンであっても、ただの人と同じになってしまうのです。

ハマンが、その肉の姿をよく表しています。モルデカイがひれ伏さなかった時に激しい憤りに満たされたように、私たちの肉は満たされないと激しく抵抗します。神に従おうとするものなら、「私にひれ伏さないとも言うのか。」と、肉は私たちに強く迫ってくるのです。自分が二番目になることを絶対に許さないのです。その表れが、ユダヤ人の根絶です。私たちが肉に従えば、その行き着くところは死なのです。

2B 御霊による肉の行ないの死

しかしハマンの死後、王はモルデカイを引き出しました。そしてハマンのいた座にモルデカイを置きました。そして、ハマンの息子十人を柱にかけて殺しました。ユダヤ人を滅ぼそうとした他の者たちも殺しました。

このようにして、私たちは肉の行ないを殺すことによって、初めて御霊のうちにとどまることができまます。「もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行ないを殺すなら、あなたがたは生きるのです。(ローマ 8:13)」先ほど肉は信仰を持った後も何ら変わっていない話をしました。肉は改善の余地がないのです。だから、殺すのです。「キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。(ガラテヤ 5:24-25)」

ここで大事なものは、すでに十字架につけてしまった、という過去形になっていることです。ローマ 6 章でも、「罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおもその中に生きていられるでしょう。(1 節)」とあります。すでに罪に支配された生活は十字架に付けられて、死んでしまったのです。そのようにみなすことによって、御霊が働いてくださいます。「あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。(6:11)」

自分は十字架につけられていて死んでいる、そして生きているのはキリストを信じる信仰に拠っています。私たちは自分が良い人間になることが人生の目標ではありません。キリストが私の内に生きておられることが目標なのです。そして、御霊に導かれることによってますます、自分の人生にキリストが現れ、キリストの似姿に変えられていることが目標です。

3B 命の支配

そしてモルデカイが王の次の位にいた時に、そこには死を免れたユダヤ人たちが、喜びに満たされていました。それは、聖霊が支配されている時の私たちの姿であります。

1C 他者の益

モルデカイは、「自分の民の幸福を求め」とあります。ハマンが力を持っていた時は、如何に自分に富があり、自分に栄誉があるかが最も大きな関心毎でありました。御霊に導かれている人は、自分ではなく他者の益を求めます。

2C 平和と喜びの実

そしてモルデカイは、「自分の全民族に平和を語った」とあります。平和がモルデカイによる支配の実でありました。素晴らしいです、御霊に従う時の実は、もちろん平和であります。

どうか、私たちにこの恵みが与えられますように。「それは、罪が死によって支配したように、恵みが、私たちの主イエス・キリストにより、義の賜物によって支配し、永遠のいのちを得させるためなのです。(ローマ 5:21)」罪がいかに自分を支配して、死の恐怖をもたらしたでしょうか？しかし、イエス・キリストが十字架につけられました。その罪の力が強ければ強いほど、キリストの力はなおのこと、義をもたらし、永遠のいのちに至らせるのです。